

令和5年12月1日発行 春燈/第78巻第12号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

2023 December

12月号



# 燈下集



○ 西川保子

問髪を容れず鳴きつぐ法師蟬

裏町に残る駄菓子屋小鳥くる

栞挟みしままの聖書や水澄めり

裏山の夕影あはし迢空忌

まなうらにかの草庵の破芭蕉

○ 佐藤信子

北向きの書齋の窓や桐は実に

思惟ふかき仏の影や実紫

火吹竹寺から借りて芋煮会

老いてなほ寄り道ばかり草紅葉

豊年の光集めて最上川

○ 園部露郷

夏の夢地獄見て来て覚めにけり

売られゆく牛や夏野に声のこす

大根抜く地球丸ごと抜く如く

恋文のやうな文面小鳥来る(孫娘)

何するも妻と二人のきりたんぼ

○ 名譽主宰 安立公彦

爽やかに言葉白づと就きくるや

仮寝覚め視野に眩しや曼珠沙華

苦瓜の名残の花や日を散らす

秋惜しむ古き友の書読みをれば

夕風に仰ぐ一樹や南洲忌

○ 主宰 鈴木直充

くろぐろと伸びる岬や天の川

一粒の真珠の首輪厄日過ぐ

吾亦紅呪文をかけて目覚めさす

無花果のきれいに割れて古稀も過ぎ

耳よりの話に乗らず敬老日

安住 敦の句

牡丹育てて子は念はずといふは嘘

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

私は三十五歳の折、春燈に入りまた交詢社の俳句研究会でご指導をいただいた。ある時、私が子供のいない寂しさをお話したところ、「子供がいたって寂しいものですよ」とおっしゃった言葉が耳に残っている。

先生は不屈の精神で激動の時代を過ごされたが、△冬瓜汁子あればあるで憂ひけり▽と詠まれ、晩年は△冬の日や手塩にかけし子に頼り▽と安らかな人生を送られた。

鷹崎由未子

安住 敦の句

親なれば子を鍾愛す遠蛙

『歴日抄』昭和四十年

安住敦師の句には家族、特にお子達への慈しみに溢れる句が多いと思う。この句も娘さんに対する深い思い入れと優しさに満ちた情景が浮かんで来ます。

娘が居ないので娘のことは解らないが、自分の父親のことを思えば思いあたることも多い。親なればこそその無償の愛である。師は遠蛙の声を聞きながら娘の帰りを待っているのだろう。

重実ひとみ